慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西村茂樹の教育思想における儒教の位置づけについて
Sub Title	
Author	篠, 大輔(Shino, Daisuke)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2006
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.62 (2006.) ,p.192- 195
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成17年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000062-0192

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西村茂樹の教育思想における儒教の位置づけについて

篠　　大　輔

本研究の概要

西村茂樹は明治初期，福沢諭吉らとともにいわゆる啓蒙知識人の一人として西洋の学問や思想を紹介した人物である。その一方で西村は当時，既に時代遅れと目されていた儒教を積極的に教育に取り込もうとしていた。西村茂樹の教育思想の中で一見，相反すると思われる西洋思想と儒教思想がいかに結びつけられていたのかを探ることによって明治期教育における儒教主義の思想構造を解明することが本研究の目的である。本年度は，研究成果をまとめた論文「西村茂樹における『自得』の意味―儒教的伝統の継承と修正―」を社団法人日本弘道会が募集していた「西村茂樹研究論文」に投稿し，入選を果たすことができた。以下，この論文の内容を要約する。

はじめに

明治期の思想を論じる上で，儒教的伝統をいかに評価するのかという問題は看過することのできないものとして常に存在している。儒教的伝統を土台として思想を構築していった西村茂樹の史的評価が分かれる背景には実はこうした儒教的伝統に対する評価の相違が潜んでいたように思われる。しかしそれ以前にそもそも西村の儒教的伝統と言われるものが江戸期の思想界で支配的な地位を占めていた近世儒教のどの部分を継承し，どの部分を修正したのかについてこれまで精緻に検証されてこなかったのではないだろうか。本研究では，西村の儒教的伝統を近世儒教との比較を通して，どの部分が継承され，どの部分が修正されたのかを西村の「自得」理解を手がかりにして考察していく。

1.　西村茂樹における「自得」理解

西村は「自得録」(「雑綴」(十)，国立国会図書館蔵）や「知経観得の説」(日本弘道会編纂『西村茂樹全集』第二巻，思文閣，1970 年，509-515 頁）の中で自身の「自得」理解を述べている。その特徴として以下の 2 点を挙げることができる。まず第一点目は「自得録」においても「知経観得の説」のおいても「自得」へと至る過程を発展段階的に捉えているということである。「自得録」においては書-経験-視察-煅煉-自得，「知経観得の説」の中では知-経-観-得というように段階を一つ一つ上がっていくことによって最終的に「自得」へと到達するというように「自得」を理解していた。第二点目は学問をして得られた知識が「経験」「観察」によって現実世界で通用することを検証しなければ，「自得」に到達しないという西村の実証主義的，帰納法的態度である。このことは聖賢の書に記されたものとしてどんなに崇められていたとしても，それを実証できなければ真理ではないと判定するということであり，実証主義的批判精神をそこに見ることができる。

2.　近世儒教における「自得」概念―朱子学を中心にして―

近世儒教において「自得」がどのような概念として用いられてきたのかを検討するにあたって，最初に文献の範囲を限定する必要がある。今回はあくまでも西村の「自得」理解と近世儒教における「自得」

概念とを比較検討することを目的としているので，文献の範囲は「自得録」の中で治心の方法を学んだ書として挙げられたものを中心に検討を進めていきたい。また西村が朱子学を重んじていたことから，主に朱子学の系譜に属する書物を検討の対象としていくこととする。

朱子学派の「自得」概念は『孟子』に始まり，程子（程明道・程伊川の敬称），朱子によって重視されたものである。こうした「自得」を日本においてさらに深く探求したのが貝原益軒である。益軒は『慎思録』の中で慎思と博学を「自得」するための方法として提示している。益軒は『中庸』にでてくる博学，審問，慎思，明弁を審問は博学に属し，明弁は慎思に属するとして，二つに分類する。博学審問を学，慎思明弁を思として，論語の中から「学びて思はざれば則ち罔し，思ひて学ばざれば則ち殆し」を引用し，学と思の相互補完性を説く。博学審問は人から聞いたり，人に質問したりするので求める所が外にあり，慎思明弁は自己の中で考えるので，求める所は中（うち）にあるという。すなわち，この学（博学・審問）と思（慎思・明弁）を相互に行わなければ「自得」には到達しないのである。（益軒会編『益軒全集』巻之二，図書刊行会，1973年，59-60頁参照）さらに益軒は『大和俗訓』の中で「自得とは慎んでよく思ひて，心中に道理をがてんして，わが物にし得たるなり」（益軒会編『益軒全集』巻之三，図書刊行会，1973年，57頁）と述べ，「自得」を定義付け，慎思を「自得」するための重要な要素として考えていた。

こうした朱子学派の「自得」概念と西村の「自得」理解を比較してみると次のような共通点と相違点を見出すことができる。

まず「自得」の定義に関して，益軒の説く「自得」と西村の「自得」理解とはほぼ同じ意味と考えてよいだろう。「自得」とは道理を会得することであるという点で一致しているとみなすことができる。また「自得」とは「安排布置」や「急迫」，「強求」といった人為的なやり方ですぐに得られるものではなく，「優游」「厭飫」「涵泳」といった長い時間をかけて学問することによって自然に得られるとする朱子学派の「自得」理解も西村の考えに通じるものがある。西村においても「急迫」や「強求」といったやり方ですぐに「自得」が得られるとは考えていなかった。学び手が主体的に長い時間をかけて研鑽を積まなければ「自得」に到達しないという認識を西村は朱子学から継承していたと考えてよいだろう。

ただし，その一方で西村の「自得」理解との相違点もみられる。西村において「自得」とは書-経験-視察-熈煉-自得，または知-経-観-得というように発展段階的に捉えられていた。それに対し，朱子学では発展段階的に「自得」へと至る過程を想定していたわけではなかった。また，さらに朱子学派と西村との「自得」理解の間に大きな相違点が存在する。それは西村の言う「経験」「観察」という要素が朱子学派の「自得」概念には希薄であったという点である。儒教において真理とは聖賢の書の中にあるものであり，それを学んだ者の経験や観察によって検証されるべき性格のものではなかった。聖賢の経典を新たに解釈し直し，以前の解釈を否定することはできたが，その経典を完全に否定して，捨て去ることは不可能であった。それは朱子学においても例外ではなかった。そうした意味で儒教はあくまでも「経学」であったのであり，「自得」とは聖賢の教えを個人の心の中で「黙識心通」し，「慎思」を重ねることによって会得することであり，現実世界にそれが通用するかを試みることでは決してなかった。儒教において西村のように経験や観察によって現実の世界に通用しないことが実証された聖賢の書の教えを否定することは許されなかったのである。このことから儒教の「自得」概念は西村の実証主義的，帰納法的性格に対してあくまでも演繹的であったと言うことができる。西村は「経験」や「観察」といった実証主義的概念を取り入れることによって儒教を修正しようと試みたと考えてよいだろう。

西村が儒教的伝統から何を継承し，何を修正しようとしたのかについてはこれである程度，明らかとなったが，では西村がどうして儒教的伝統を継承し，修正しようとしたのかという問いについてはいまだ解明されずに残されている。次章では西村の学問遍歴をたどることによってこの問いを明らかにしていきたい。

3. 西村茂樹の学問遍歴

西村は自身の学問遍歴について『往事録』をはじめ，多くの場面で回想している。今回は『道徳問答』の中で，西村が自身の学問遍歴について語っている箇所を参照しながら検討を進めていきたい。その中で西村は自身の学問観が変遷したおおよその年齢を述べているので，その年齢ごとに西村がどのような学問を学び，彼独自の「自得」理解に至ったのかを考察していくこととしたい。

西村は 8 歳の時，支藩の佐野藩において師家について読書，習字の学習を開始した。10 歳になり，本藩の佐倉藩に戻ると藩邸内の成徳書院に入り，そこで読書，習字，槍剣などを学んだ。14, 5 歳の時に『日本史』『日本外史』を読み，儒教に少し疑問を持ち始め，眼病が治った 23 歳の時に読んだ会澤正志斎の『新論』の主張に大いに共感している。またその一方で同じ年に西村は大塚同庵に入門し，西洋砲術を学び始めている。翌年には佐久間象山の下に入門し，西洋砲術と西洋兵学を学んでいる。この時期の西村は「是より儒教を本として傍ら諸子百家に及び，頗る自得する所あるが如きを覚へたり」（日本弘道会編『増補改訂　西村茂樹全集』第一巻，思文閣，2004 年，661 頁）と述べているように，あくまでも儒教が学問の本であり，洋学や西洋砲術等は末であり，技芸に過ぎなかった。この時期の西村の学問観は佐久間象山の言う「東洋道徳・西洋芸術」的発想に基づくものであったと言えるだろう。

34 歳の時，本格的に洋学を学ぶために，佐倉藩に招かれていた手塚律蔵の下に入門し，蘭学，英学を学び始める。そうした中で西村は儒教に対して強い疑念を抱くようになる。「然れども其歴史に依りて融解すること能はず，従前自得したりと思いし者，今は反て岐路に彷徨することとなれり」（同上，661 頁）と述べ，西洋の歴史によって，これまで自得していたと思っていたものが誤りであったと考えるようになっていた。41, 2 歳の時より「全く東洋の学問を棄てゝ専ら西洋の学問を為さん」（同上，661 頁）と決めた西村はこれ以降，儒学と決別し，西洋書の訳述に力を入れ始める。この時期の西村は洋学を信奉し，儒学をはじめとする東洋の学問を固陋であるとして否定する典型的な洋学者であったと言えるだろう。しかし西村はその後さらに西洋の書籍を読む進めるにつれて，「人情」，「風俗」，「国体」，「歴史」が国によって違うことを考慮にいれないで，西洋のやり方を導入するば，必ずその弊害が出ると考えるようになった。さらに西村は西洋の哲学に比べて言行一致や知行一致を心掛け，治心の工夫によって「自得」を目指すという点が儒教の長所であると認識するようになり，再び儒教の研究を始め，西洋哲学と比較したり，仏教を参考にしたりしながら，思索を重ねていった。そして終に「恍然として自ら悟る所」（同上，661 頁）があったという。それは「天地の道，人類の道にして，儒教を非ず，哲学に非ずして儒教と哲学とを以て根底」（同上，661-662 頁）としたものであった。この西村の悟りは『日本道徳論』の中で展開され，「天地ノ道」「人類ノ道」へと至る方法はまさに「知」から始まり，「経験」「観察」を経て「自得」へと至るという西村の「自得」理解に一致したものであった。西村は，道を「自得」することを学問の究極的目標とする儒教の長所を継承し，真理が事実と合致するかを検証するために「経験」や「観察」といった実証主義的科学的方法を取り入れることによってあくまでも経典の中に真理を求めるという儒教の短所を修正した。

おわりに

江戸時代においては，学習者が主体的に学ぶ行為に高い価値を見出す教育思想が支配的であり，朱子学はその根拠として想定されている。（江森一郎『「勉強」時代の幕開け』，平凡社，1990年，参照）西村が儒教の中に見出した長所もそうした学習者の主体的な学びを重視した教育思想であり，その象徴が「自得」だったのではないだろうか。江戸時代の教育思想に昨今の日本が抱える様々な教育問題や教育制度の疲弊を打破する糸口を見出そうとする研究が現在，盛んに行われるようになったが，西村は既に明治期において近代的教育制度が整備されていく中で失われつつあった儒教の中に学習者の自主性を尊重する思想を発見し，それを何とか継承していこうと努めた。しかし，西洋の学問を学んだことによって，経典の中に真理を求めようとする儒教の限界に気づいていた西村は「経験」や「観察」といった近代的学問には不可欠の科学的思考法を取り込むことによって儒教の修正を試みた。このように西村の道徳論は学習者の主体性を重んじるという儒教の長所を継承し，経典に埋没してしまうという儒教の短所を修正することによって生み出されたものであった。

個別指導場面における説明行為が因果関係の理解に与える影響

伊　藤　貴　昭

1. はじめに

理科学習を促進するためには，用語の記憶を促すよりも，その背後にある因果関係の理解が重要な役割を果たす。しかし，実際の教育場面において，多くの生徒にとってその因果関係の理解が困難であることが指摘され (Graesser, Leon, & Otero, 2002)，学習に関する心理学では理解を促進するための方略を研究することが目的の一つとなっている。

学習内容に対する理解度を高めるために，学習中に考えたことを説明させることが学習方略として有効であることが示されており，これは自己説明効果と呼ばれている (Chi, deLeeuw, Chiu, & La Vancher, 1994; Chi, 2000)。Chi ら (1994) の実験では，中学生に人体の循環系についてのテキストを読ませ，一文ごとに頭で考えたことを説明させるという手法で行い，発話の中にどれだけ学習者の既有知識が含まれるかを説明の指標としている。なぜなら既有知識の含まれた説明が理解には重要であるからである (Chi, 2000)。

しかし，必ずしも説明行為が学習に有効であるとは限らない。伊藤 (2006) は，Chi らと同様の学習材料を用い，中学生を対象にある程度まとまった説明をさせる場合の学習効果を検討した（伊藤，2006)。実験の結果から，学習者に説明させてみても，説明が学習内容の要点をまとめるだけであるか，あるいは内容をそのままコピーするだけの説明では必ずしも学習効果が表れるわけではないことが示された。つまり，まとまった説明を行う場合，学習者は自分の既有知識と結びつけた説明を行わないのである。これは，学習者が説明行為そのものに負担を感じていることの表れではないかと思われる。さらに学習者は中学生であるため，単純に説明することに慣れていないためということも考えられる。では，その